# 四丁目裏路地の隠し事

小魚ブルー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
四丁目裏路地の隠し事

【Ｎコード】
Ｎ４９１５Ｓ

【作者名】
小魚ブルー

【あらすじ】
天川市四丁目裏路地には、あの世とこの世のはざまでさまよう妖怪たちが集結する。一人残された飼い主を案じる動物。子供の将来を気にして成仏できない母親。記憶を失くして何かに縛られ続ける妖怪。自分の存在に悩む妖怪を助けるために、陰陽師は高校に仲間を求める張り紙をした。「超常現象研究会、新入部員大募集」
集いしは霊の思いを代弁するイタコの少女と、神を呼び寄せる神官の少年、男嫌いの破戒巫女。
経済成長に忘れ去られた町で、失くした何かを探すため、彼らは今

日も走りまわる。

# 1、音楽室のあの世とこの世

猫が死んだ。

寒い、寒い夜だった。星が輝いていた。台所の隅の、やつのお気に入りのクッションにもたれかかりながら天命をまっとうした。十二歳。当時の私と一歳違いの、可愛い弟。

それからだ、私が‘生’と‘死’の世界に強烈な興味を持ったのは。

「ねー、宿題終わったー？」

「まだ。終わるわけないよ、あんなの」

「うーん……宙野（そらの）さんでもだめかぁ……」

「ごめんね。あの量はさすがに無理」

申し訳なさそうに私が返す。‘生’の世界ではそれなりに優秀な成績で、それなりの運動音痴という普通の女子だ。

‘生’の世界の友人達はそろいもそろって同じ趣味、同じ顔。髪型も同じだったら、好きな芸能人も一緒。標準装備はふわふわのシュシュ、黒いゴムとコーム（櫛）、カラフルなペン、エトセトラエトセトラ。使用言語は「えー？」「マジで？」「うっそー」「ヤバいよね」。これら四つの言語を表情や口調だけで使い分けていく彼女等はある意味で天才かも知れない。残念ながら私にそういう処世術は無い。

そして、彼女達の話題はいつも「コイバナ」と呼ばれる類のもの。それに同調する私。溶け込まなければ命は無い。一人ひとりは弱いくせに、群れたらとたんに強くなったり威張りだす彼女達は私の最

大の敵であり味方だ。だから溶け込む。無駄に敵を作るのは趣味ではない。
‘生’の世界はとかく辛いものだ。自己主張も許されない。

「はぁ……」
『友里嬢（ゆりじょう）。いかがなされた？』
「別に？」
‘死’の世界の来訪者が耳元で声をかけた。よっこらしょと私の肩まで這いあがってきたらしい。ご苦労なことだ。半透明の、誰がどう見ても幽霊と呼ばれるだろうその猫は、生前は柔らかかったであろう肉級で私の頭をぽんぽんと叩いた。
「止めて。痛い」
『おや？友里嬢は人間なのに妖（あやかし）の痛覚が分かるのですか？』
「気分よ。きーぶーん」
ここまで話しているのに全く気付かれないのは、私が声に出して会話していないから。脳内や心中で思ったことが伝わる、所謂テレパシーという奴は本当に便利だ。とくにテスト中。私が秀才を演じていられるのはこれと日ごろの努力のおかげだろう。なんてことを考えていると再び猫がぽんと頭を叩いた。どうやらこの動作が気に入ったらしい。
「叩かないでってば」
『どうせ感覚は伝わらないのですからよろしいでしょう？』
「いや、伝わってるよ」
羽毛のような何かが頭におちてくる、妙な感覚が。その妙な感覚が彼らの存在している証。これがなくなると私でも彼らの存在に気付かないだろう。

くだらない、数学教師の解説を聞き流しながら、心の中で思ったことを率直に奴にぶつける。
「‘生’の世界は退屈で、自由じゃないわ」
『なら、‘死’の世界においでになられますか？』
「今は遠慮よ。この年であの世に行くつもりはない」
そう返答すると、肩の猫はつまらなそうに一声鳴いた。

「友里！ゆぅーりぃぃぃぃ！」
騒々しく飛びこんできた我が学友は、教室の引き戸を引っ張り押し出し私の名前を叫んだ。非常に迷惑だ。一度きつく睨むと、睨まれたことより私を発見したことが嬉しかったのかいきなり飛びついてくる。
「……何？」
彼女の左手をつかみ、力を込める。そのまま投げ飛ばすことも考えたが、さすがにそれは酷だと思ったので、ねじってみた。悲鳴のような声とともに飛びのいた残念な学友が私に対して猛抗議する。
「今絶ッ対手首の骨逝ったよね！？」
「知らない。抱きついてくるほうが悪いんでしょ？」
「あ、接触恐怖症、だっけ？ごめんね」
肩をすくめる動作とともにふわふわと茶色の毛が揺れる。放課後特有の生温かい空気に触れて、柔らかく輝く。
「で？なんの用なのよ、美紀」
「あ、忘れてた。そうだった。部長から呼ばれてきたんだよっ！ほら早く支度して！」
支度して、と言う前に私の手をむんずとつかんで、教室から出ていく。帰りどうしようか。鍵あいてると良いなぁ。いちいち階下ま

で取りに行くのはあまりにも面倒くさい。そもそも教室に鍵をかける意味が分からない。高校生なんてロクな金持ってないでしょうに。
なんてことをのほほんと考えている間に、教室の扉がいよいよ遠のく。2Bと書かれた札がかかった、スチールの扉が閉まってしまった。光速（マッハ）の早歩きで廊下を進む美紀。私は相変わらず引きずられている。薄紫と灰色の、制服のプリーツスカートがぐしゃぐしゃだ。下にはスパッツをはいているのでなんら問題は無いのだが。
「君、廊下は走らない」
中年のガマガエルのような教師が美紀を指さして言った。ぴたりと直立不動の姿勢で、お言葉ですが、と切り出す。
「先生。走るというのはどこが基準なんでしょうか。たしか先生は授業中、両足が同時に地面から離れる瞬間がある移動方法を‘走る’だとおっしゃいました。では、お伺いしますが、私は両足を同時に地面から離していたでしょうか？私は離した覚えは全くございませんわ。いかがですか？先生、私は走っていまして？」
教師が言い淀む一瞬の隙をついて美紀が再び歩き出した。言い訳をさせたら天下一品だ。お嬢言葉がやたら腹立つ。追いかけて注意しない教師も教師だと思うが。
そうこうしているあいだにコンピューター室の前にたどり着いてしまった。もう逃げ場は無いらしい。今までどこにいたのか、猫が諦めろと言わんばかりに一声鳴いた。美紀が勢いよく扉を開ける。暗かった部屋に自然光があふれた。
「部長。水鳥部長。連れてきましたよ」
「ご苦労」
大儀そうに頷いて、メインコンピューターの前から立ち上がった眼鏡の男子は、この部活の部長である水鳥智治は、にこやかに笑いながら私に近づいてくる。その不快な笑顔を一にらみして封じてから、むすっとした表情のまま小さく挨拶した。
「やぁ、友里君。久しぶりだね」
「どうも。三日ぶりですね、水鳥先輩」

しばらく両者のにらみ合いが続く。にこにことした笑顔を崩さない先輩と、ふてくされたような顔で立ち上がった私。
「何の用ですか？」
「最近会っていないからね」
「冗談を言ってるなら刺しますよ」
「物騒なことを言わないでくれたまえ」
眼鏡をちょいっと上げて、ぎざったらしい口調でそんなことを言われた。大変不快だ。
「本当になんの用ですか？」
そろそろ怒るぞ、と私は腕を組む。後ろからちわーっと声がかかった。
「おぉ、一触即発？俺ナイスタイミング？」
「あ、薫（かおる）先輩。こんにちは」
「美紀の巫女ちゃんじゃん。おひさー。それで、何があった？」
「この二人がこの状態になることはよくあることですよ」
よくあることで悪かったな。
「いい加減に本題に入ってくれませんか？」
入らないのだったらせめて鞄くらいは取りに帰りたい。じとっとした目で水鳥先輩を見ると、これは失敬、と扉を再び閉めた。暗がりの中で大量の妖が動く。
『お嬢！お久しぶりでさぁ！』
『巫女の姐さんも！』
わらわらと群がる小妖怪をあしらいながら、手ごろな回転いすに座った。すかさず猫又が紅茶を出してくれる。
「よくもまあここまで調教したものね」
「妖怪を操るのが僕の仕事だからね」
さもなんてことなさそうに言うが、プロの霊能力者でもここまで調教するのには三十年ほどかかるだろう。この人はたった一ヶ月でこんなことを成し遂げるから、悔しいがその点では評価せざるを得ない。

「さぁ、始めようか。超常現象研究会。略して超研の部活動を」
「待ってました！」
薫先輩がはやし立てる。周りの妖怪達も立ち上がって拍手を始めた。こんな環境だからきっと新入部員が三人しか入らないんだろうな、と推測してみる。水鳥先輩の琥珀色の目が闇の中で不気味な光を放つ。
「今回は学校の七不思議にいよいよ手をつけてみようと思う。長い間放置してきたが、そろそろ着手しなければまずいだろう」
「質問！七不思議ってなんですか？」
話し始めて三秒で質問を浴びせられる先輩。満足そうに答える。
「この高校には七つの伝説が残っている。ほかの学校にもよくある話だが、この学校の伝説は少し変わっていてね。妖怪共がやたらとおばちゃん臭いんだ」
「たとえば？」
「有名なのは“水曜日の夜十時に音楽室の肖像画達が井戸端会議を始める”だね。この時間には十年ほど前からバラエティー番組がある。その所為か、ベートーヴェンが最近の政治について愚痴ったり、モーツァルトが芸能人の結婚に嘆いたりするらしいんだ」
もし本当にそんなことがあったのなら歴史上の偉人に乗り移ってなんて話をしているんだその妖怪達は。髪型はアレでも一応偉い人のはずだぞ。心の中でしっかりとツッコンでいると、美紀も本当だとは思えないらしく、疑う言葉を素直に口に出した。
「……冗談ですよね？」
「本当だよ。見た人だっている。僕も見た」
とんでもないことをさもなんでもないように言う。この先輩はそろそろ本気でどうかと思う。頭が痛くなってきた。
「まず、その肖像画の皆さんにおとなしくしてもらおうと思う。保護できるなら保護しよう。あまり世間に広まってしまうと、ただでさえ妖怪に優しくない環境がさらに悪くなるだろう。そうすると困るのは彼らだけではない。彼らの加護を受けていた人間達にもいろ

いろな災難が降りかかる」
　化け物の加護を受けて生きながらえている人間も少なくない、と付け加えて、水鳥先輩は言葉を切った。人間は妖怪を嫌うが、妖怪なくしては人間の存在はあり得ない。妖怪の加護がなければ作物も実らないし、病気も治らない。
　超常現象を人間は“科学”を使って解き明かした気になっているが、それは大きな間違いなのだ。だから私達超能力者は理科が嫌いだったりする。
「何故、自分が来たのかと友里君は聞いたね」
「はい」
「口寄せをしてもらおうと思う。僕や薫、美紀君は妖怪の声が聞けるが、ほかの部員は聞けないからね。
まわりの人間に妖怪の気持ちを伝えるなら、妖怪を乗り移らせる口寄せが一番手っ取り早い。
そして、このメンバーの中で口寄せができるのはただ一人」
「私だけ、と。別に構いませんよ」
　その返答に満足したのか、水鳥先輩はにっこりほほ笑むと、後ろの棚に何やら数字を入力して、数枚の紙切れを取りだした。人差し指と中指ではさんで何やらぶつぶつとつぶやくと、鳩とカラスの中間のような大きさの鳥が現れる。
「ほかの部員に伝えてくれたまえ。本日九時学校前集合、とね」
　鳩もどきがばさばさと飛び去ったのを確認して、先輩が窓を閉める。妖怪は自然光が嫌いだ。
「では、解散！」
　マイペースそのものの先輩が大きく号令をかけた。

## 1、音楽室のあの世とこの世（後書き）

「俺思うんだけど」
「なんですか薫先輩？」
「勝手に決めて、勝手に帰って。あいつ以上にマイペースな人間っているのか？」
「さぁ、どうかしら。世界は広いから。でも、少なくとも私はそんな人間がいたら会いたくないですね」
「上に同じ。でも、なんで憎めないんでしょうね？」
「……人徳の差？」
「「まっさかー」」
「うん。今の返答で俺もそれは無いと確信した」

## 2、夜の学校には危険がいっぱいです。

午後九時五分を腕時計が告げる。どこに行くの？だとか何時に帰るの？などと心配する母親を説得し、制服に袖を通した。普通の格好で行ってもかまわないと言われたが、これが私の仕事着だ。それに許可はもらっているとはいえ制服なしで学校に入るのは気持ち悪い。

「あ、友里！ここだよ！」

美紀が手を振っているのが見えた。紅い袴を穿いていることからやはり仕事という気持ちで来たのだろう。世間から完全に浮いた格好で手を振られて、私も周りの視線を気にしながら手を振り返した。

「やぁ、遅かったね、友里君」

「すみません。親の説得に少々時間を食いました」

「ふむ……。それは仕方がないね。僕等異能者と呼ばれる集団は周りの理解を得難いものだ。とくに君のような突発的な異能者は親の認知が追いつかない」

「はぁ……」

難しい言葉ばかり使われても、私の脳がついていかない。突発的？認知？成績優秀な水鳥先輩は周りも自分と同じ理解力を持っている前提で話すので、美紀なんかは隣で頭バーストさせている。秀才のマイペースは本格的に困る。

「それより、薫先輩はまだなんですか？」

美紀が強引に話を変えた。バスが道路をパッパーと軽いクラクション付きで通り抜けていく。私達の隣のバス停で止まった。赤と白で塗り分けられたカラフルなバスからぞろぞろと人が降りてくる。これで降りてこなかったら確実に遅刻だ、と美紀が愚痴る。

「あ、皆集まってた？悪い」

「十分遅刻だよ、君」

「すいません、先輩方。事故が起こったらしくって」

薫先輩の隣から申し訳なさそうに小柄な男子が出てくる。はて、誰だったか。首をかしげていると、水鳥先輩が笑顔で男子に近寄る。
「久しぶりだね、えーと……空衣(あおい)君、だったかな？」
「あ、はい。そうです。部活にもなかなか顔を出せずにすみません」
「いやいや、気にすることは無いよ」
ニコニコとやたら笑顔で握手する二人。周りの人間が変なものを見る目で二人を見ている。私と薫先輩と美紀はそっぽを向いて他人の振りをする。空衣くんには申し訳ないが、この先輩と同類格と思われるのは大変心外だ。私はまだ変人になる気はない。
「さぁて。大体君との挨拶は済んだところで。君、人間じゃないだろ」
話のつなぎ方がかなりおかしかった気がする。そして話の内容もかなりおかしかった気がする。ぱーどぅん？貴方今なんとおっしゃいましたか？よく小説や漫画で自分の耳を疑うという表現があるが、実際にそんな感情を持つなんて夢にも思わなかった。否定するよな、してくれ。そんな目で薫先輩が空衣くんを見つめる。その思いを知ってか知らずか、照れたように頭を書いた空衣くんが一言
「いつから気付いていましたか？」
私達の期待を見事に裏切る返答をした。
「入学式から、かな。なんとなく周りとは違う雰囲気が出ていたからね。やっぱり、少し妖気が薄いのかな。半妖？」
「はい。母が九尾狐(きゅうびこ)です」
「あー……じゃあ、君長生きするだろうね。うらやましい限りだ」
さも当然のように会話は進むが、これは普通の会話ではない。ついていくのが精いっぱいの、現実離れした会話だ。そもそも、妖怪と人間が共存するなんて、まず無い話なのだが。この先輩はそれが普通のように話を続ける。冗談じゃない。こっちはついていくのだけで精いっぱいだ。
「ちょっ、ちょっと待ってくれ。九尾狐ってなんだ？おいしいのか？」

「食べないでください」
空衣くんがツッコむ。先輩に対して切れ味のあるツッコミを返すとは……私の中の株が少し上がった。
「ふむ……君達は知らないのか。九尾狐とは中国神話に登場する狐の妖怪だ。名前から分かる通り、九本のしっぽを持っている。妖狐の中でも特に万単位の年月を生きた古狐がこうなる。まぁ、古株ってことだな、君。空衣君。何歳かね？」
「はい？もう忘れちゃいましたけど……一番古い記憶は目の前でわけわかんない旗振りながら火縄銃……でしたっけ。なんかひもがひょろひょろ出た鉄筒で馬に乗った兄ちゃん達をばったばったとなぎ倒してるところですかねぇ……」
「えーと……長篠の戦？」
「そうです！それです！」
ようやく思い出せた！ここまで生きると記憶あやふやで困るんですよねぇとかなんとか言いながら空衣くんが飛び跳ねる。頭が痛い。バファリン飲もうかな。私の周りには奇人変人が集う。もう慣れた気がしていたがその認識はどうやら甘かったようだ。
「長篠が……何年だったっけ、友里ぃ」
「あんたそんなのでよく高校入学できたわね……１５７５年よ。以後和やかな織田天下って覚えておきなさい」
「はーい」
「友里ちゃんって、教師向いてるかもね。なっちゃえば？」
「候補には入ってます」
頭から白煙を出していた薫先輩がようやく会話に参加してきた。全員の復活を確認してから、水鳥先輩が号令をかける。
「さぁ、君達。いよいよ出発の時がやってきたようだ！」
白い紙をぱたぱたと振って鍵の形に変化させる先輩。躊躇なく鍵穴に突っ込み、がちゃがちゃと適当に動かして門を開けた。金属のきしむ嫌な音がして、築ウン十年の校舎へと入っていく。
「あ、待てって智治（ともはる）！」

薫先輩が水鳥先輩のファーストネームを叫びながら走っていく。と、いうか水鳥先輩の名前を聞いたのは初めてな気がする。いつも一人でコンピューター室にこもって妖怪と遊んでいるから、友達なんていないと思っていた。こんな卑屈で偏屈な先輩にも友達の一人はいたのかとちょっとほっとする。

「いいからついてきたまえ。遅いぞ、走れ！」

「おいトモ！お前が速いんだよ！」

二人の掛け合いが夜の空気に溶けていく。こんなに騒いで宿直の先生にバレないのだろうか。後ろでキィィと音を立てて門がしまった。

「さて、諸君。今から今日の活動を説明する。まず、音楽室の位置だが、本館五階。東階段から行くのが一番速いだろう。だが、それには大きな問題がある――――」

何の問題だ。水鳥先輩がわざわざ“大きな”というくらいだから相当な問題だろう。全員が固唾を飲んで次の言葉を待つ。

「二階に宿直室があることだ。そして今日の宿直当番は鬼の数学教師守山、略して鬼山が務めている」

「「「「な、なんだってー！」」」」

小声で大合唱する。それを聞いて満足そうに両手を上げ下げする先輩。だんだん私までアホに見えてきた。

「ってどうするんだよ。中央階段から行ったほうがいいんじゃないか？」

「まぁ落ち着きたまえ、薫。ここに宿直当番の見回りルートがある。美紀君、懐中電灯を」

「はい、先輩」

美紀がペンライトで光をあてる。白のＡ４サイズの紙に校舎の断面図が六つ、綺麗に並んでいた。
「この赤いラインが施錠確認ルート。そして緑の文字が見回り時間だ」
ワードとペイントを駆使して書き上げたらしい。ゴシック体がポップに並んでいる。にしても、こんな情報はどこから仕入れてきたのだろうか。全てを知りえた素敵な中学生からだよとか言われると困るのであえて口にはしない。
「見回り時間は九時半か。そろそろだな」
「では入ろうか」
「「「「ちょっと待てーい！」」」」
「む。なんだね？」
薫先輩が必死で水鳥先輩を押さえつける。この人はマイペースすぎだ。自分は決して見つからないとでも思っているのだろうか。この人だけなら捕まっても何ら関係ないが、今はグループで行動している。巻き添えはごめんだ。
「お前、いま何時だと思ってる」
「九時十五分だが、それが何か？」
「あと十五分で見回りタイムだろうが！危険すぎる！」
「どこがだね。十五分もあれば十分到着できるだろう」
悪びれもせず先輩が言った。薫先輩が頭を抱える。激しく同情する。今度、彼の誕生日には頭痛薬を送ろうと決めた。
「もしもってのがあるだろうが。中央階段から行こう中央階段から」
「待ちたまえ。それだと七不思議のひとつにぶち当たることになる。七不思議を発見してしまうと、動きづらくなるのは僕達のほうだろう。口寄せの途中で鬼山と鉢合わせ、そんなのはごめんだ」
もしそうなったら先輩を盾にして私は逃げる。
「友里君。君、今とてつもなく失礼なことを考えなかったかね？」
「気のせいですよ、先輩。疑心暗鬼だとクラスメイトから嫌われますよ」

「む……。そんな訳なので中央階段は却下。東階段しかないだろう」
再び窓からの侵入を試みる先輩。それを必死で抑えつけていると、コンクリートの地面を踏む音が聞こえた。
「……しぃ……音……」
鬼山だ。全員の頭にその単語が浮かぶ。あまりにも外がやかましいので見回りに来たんだろう。全員が息をひそめる。体を低くして、物影を探した。
「藪……！」
とっさに私は思念を送る。足音に細心の注意を払いながらそうっと藪の中にまぎれた。動物霊が大量にわいていた。
「助かったよ友里君」
「ありがとな」
「さすがです先輩」
「ありがとー」
褒められて悪い気はしない。少し得意げに鼻を鳴らすと、なぁ、と猫霊が擦り寄ってきた。
「っかしいな……確かに音がしたんだけどな。考えろ俺。俺が泥棒ならどこに逃げる？」
余計な推理を始めた鬼山に空気読めない奴大賞を送ろうと思う。黒くねむそうな目が捉えたのは、私達にとって最悪の展開を予兆するそれだ。
「藪、か」
マズイ。明らかにこれはマズイ。体をちぢこめても、確実に見つかる。非常に困ったな、と水鳥先輩が肩をすくめた。そんなことしている場合じゃないだろう、と薫先輩が頭をはたいた。その時、美紀が下唇に人差し指を当てた。そのあと、猫霊を指さす。
口寄せをしろ、という意味だろうか。猫に一声鳴いてもらって、その場をやり過ごす。これは案外いけるかもしれない。鬼山は百メートルくらいに近づいている。やるしかないだろう。失敗したら申し訳ないな、と心の奥で思いつつ、私は下唇に指を伸ばした。子猫

の霊と目があう。子猫がかるくうなずいた。
『なーぉぅ……』
想像より物悲しい声で子猫は鳴いた。親猫を求める子のように、闇夜に小さく響いていく。
「なんだ、猫か」
美紀が目でもっとやれ！と訴えてくる。私の意志で動くわけではないのだから、どうすることもできないが、子猫がそれに応じたようだ。二、三度。今度は嬉しそうに鳴いた。
『にゃぅ、にゃおぅん！』
鬼山が遠ざかっていく。全員がほっと肩を下ろした。猫霊が嬉しそうに飛び跳ねる。
「こんな声、人間の声帯からでるのね」
「え？先輩があの声出したんですか？」
「そうよ。口寄せっていうのは、霊を私の体に乗り移らせることだから」
自分の体を一時的に貸し出す、と言った感じだろうか。私の精神はいったん脇にそれて、霊が自由に動かす。口寄せ中は私の精神におかまいなしに体が動く。私が命令できるのは口寄せの中止だけだ。
「へぇ……口寄せって案外不便なんですね。霊を自由に操る術かと」
「まぁ、名前負けしてる術ではあるわね」
事実をばっさり言われると痛い。戦闘向きではない術だし、霊の能力を一時的に使うことはできるが、それも私の意のままという訳ではない。訓練を重ねると意のままに操れるらしいが、そんなことをしている暇は学生にはない。
「さぁ、鬼山が行ってそこそこだ。そろそろ行こうか」
水鳥先輩が言った。全員ががさがさと立ち上がる。夜の学校は高く、威厳のある姿で立っていて、昼間あんなに親しみやすかった空間が一気に謎の建物という感じになっていた。
懐中電灯が夜を切り裂く中、しばらく殺した足音が響く。

## 2、夜の学校には危険がいっぱいです。（後書き）

「そういえば、何で鍵を借りて入らなかったんですか？」
「ふふん、愚問だな、美紀君。無許可で侵入したからに決まっているじゃないか」
「自信満々にいう言葉とは思えないな」
「超研っていつもこんな感じなんですか？」
「否定できない自分が悔しいわ……」

## 3、貴方の歌をお聞かせください。

「ちょっと待て。お前このタイミングでここによるか？」
「何がだね薫」
靴箱前で薫先輩が水鳥先輩の肩をつかんだ。しれっと水鳥先輩がふりむくが、正直言って私は心臓がとまりそうだ。この状況で前を向かず懐中電灯をつけたまま玄関に立っていられるその精神を疑う。
「学校に来たら靴箱で靴を脱ぐ。これは常識だろう？」
「あぁ確かに常識ですよ。だけどな。今は常識外の行動をしてるんだよ！」
思いのほか大きな声が出て、全員が口に指をあてる。懐中電灯のスイッチを切ると物陰に隠れて説教が始まった。
「と、いうか常識外の行動をしている自覚は無いんですか？」
「無いよ」
さも当然のように言うな！
途方もない怒りと呆れを何とか抑え込んで、ゆっくりと立ち上がる。よく叫ばなかったものだ。自分で自分を褒めてあげたいってこういうことを言うんだろう。
「さて、そろそろ行こうか。薫も五月蠅いことだし、ここはビニール袋を失敬して靴を入れていこう」
ぺたぺたと足音を立てながら水鳥先輩が廊下を進む。なんでこの人はこんな状況下においてもマイペースなのか。今度モンブランの頂上に一人置いてきぼりにでもしてこようか。そうすればマイペースも治るかもしれない。
「そういえば空衣。お前のかーちゃんって狐なんだよな？」
「はい？え、あ、そうですけど」
「入学式とかどうしたんだ？」
「人間にきっちり化けられますよ」
空衣くんが得意そうに言った。妖怪は意外とハイスペックらしい。

狐と人間を行ったり来たりというのが何ともうらやましいなと思った。脱走するの簡単だろうし。窓から飛び降りるのも可能だし。
「でも母さん、最近どーも調子が悪くて。この前食べたチーズが原因だって言ってましたけど」
ずいぶん現代的な狐なようだ。狐が乳製品食べるなんて聞いたことがない。
「紫の冠の人が食べさせてくれたらしいんですけど、どうも怪しかったって。顎髭長いし。木の棒持ってるし」
「えと、聖徳太子？」
「そうです！それです。さすが美紀先輩！」
前言撤回。千年以上前の話がついこの間になってしまうのか。恐るべし狐。それを考えてか考えずか、美紀がのんびりと言った。
「じゃあ、ビオフェ●ミン飲まないとね」
「そうですね。明日買ってきます」
千年以上前のチーズで腹壊すんならビオフェ●ミンの効果もかなり遅く来るんじゃないだろうか。そんなことを言うと空衣くんの何かが壊れるだろうと悟って、私は無言で笑っておいた。

「さて、諸君。十時までまだだいぶあるが音楽室についてしまった！」
「しー！」
全員が口元に人差し指を当てて叫んだ。ホントにこの人からは目が離せない。離したら何しでかすかわからない。急いで音楽室に連行して、中から鍵をかけてつっかえ棒を仕込んだ。窓には厚手のカーテンを引き、懐中電灯の明かりだけで椅子に座る。
「後二十分もあるぞ。どーすんだ？」

「とりあえずお茶を持ってきたから飲もうじゃないか」
「何故そんな結論に至るんですか」
「そこにお茶があるからだよ」
頭が痛い。そこにお茶を持ってきたのは貴方でしょうが。自分で理由作っといてそれは結論になるのですか、とひたすら脳内でツッコむ。声に出せないのが悔しい。ちくしょう、先輩後輩は無くすべきだ。
「しかし……夜の学校というのも不気味なものだね」
金属製のマグカップに紅茶を注ぎながら水鳥先輩がつぶやいた。ほぼ真っ暗の室内はしんと静まり返っていて、墨をぶちまけた黒さとはまた違った、不思議な色合いと調和している。
私はこの闇が好きだ。蛍光灯みたいな人工的な光で照らされた、不気味なくらい明るい部屋よりも、こんな自然に溶けたような、藍とも黒とも言い難い闇が大好きだ。ここで目をつぶってじっとしていると、溶けてしまいそうな、消えてしまいそうな、危なげない心地よさが体を包んでくる。
「闇が怖い、なんて認識。私達には程遠いものなのかもしれませんね」
「だね」
美紀が笑った。私達にとって、闇は還るところであり、怖いところではない。むしろ、私が私になれる貴重な場所なのだ。
「最近は純粋な闇が少なすぎる。妖怪にとっても、異能者にとっても、優しくない社会が出来上がってしまった。僕等はそのことを憂うだけで、何もしてこなかった。それが悪かったのかもしれないね」
どこか遠くを見る表情で水鳥先輩が言った。空衣くんが小さく頷く。薫先輩が一口紅茶をすすってから、大きく息を吐き出した。
「神呼びなんて職業、この高校のどれくらいが知ってるだろうな」
「口寄せなんて単語も」
私が小さく付け加えると、美紀が指を五本立てた。苦笑しながら紅茶を口に含む。

カーテンを広げると、霞んで消えそうな星が見えるのだろう。いくらここが田舎だと言っても、表通りのネオンや街路樹のＬＥＤは眩しい。節電を心がけるならその灯りを全て消せばどうだと叫びたいが、そんなことを今ここで叫んでも、お役所の偉い人たちは取り合ってくれないだろう。妖怪の一揆にあっても知らないぞ。

少しずつ夜の闇が濃くなり、十時まであと数分の時だった。

『時間ですよ、ヴェンさん』

『ん……？起こさないでくれよアルト。朝帰りでねむいんだよ……』

『授業中眠らなかったのですか？彼女の歌、聞き逃しますよ？』

『それは困るけどさぁ……』

全員の顔が凍りついた。すごくシュールな光景だった。シュールという言葉では足りないくらいシュールだった。美紀の口がどういうことなの？と動く。知るか。私が聞きたい。

音楽室の肖像画（この高校は精神年齢が低いことに置いてある）から手のひらサイズの偉人がぴょんぴょん飛び降りてくる。ビデオ観賞用のテレビを精一杯ジャンプして電源を入れ、机の前にずらりと並んだ姿はそこそこ可愛かったが、違和感の塊に可愛さは払拭されたようだ。

硬直している私達にようやく気付いたミニマムベートーベンが駆け寄ってくる。精一杯足を動かしているが、体が体だけでえらくスローだ。

『やぁ、お客さんだね。歓迎するよ。君達も彼女の歌を聞きに来たのかい？』

「歌？」

美紀が首をかしげる。ミニモーツァルトが不思議そうに私を見上げた。

『おや。てっきり彼女の歌を聞きに来たのかと思いました。ご存じないのですか？』

「えぇ。彼女とは？」

『大戦で亡くなった歌手の方ですよ。ほら来ました』

テレビからノイズとともに歌声が聞こえてきた。ソプラノと言うには少し低く、アルトより高い、透明な声だった。まるで澄んだ湧水のように私の耳を通り抜け、心地よいリズムとメロディーが轟音に疲れたそれを癒す。
「……いい声だね」
『だろう？我々の宝だよ。なぁ？』
『あぁ！』
ミニマムバッハが嬉しそうに同意した。のんびりと続くその歌は、軍事曲でもなんでもなく、最近はやりのなめらかな歌だった。こんこんと湧き出る歌声に、水鳥先輩がうっとりと眼を閉じる。
「素晴らしい歌声だね。テレビに憑いてるなんてもったいなさすぎる。そう思わないかい？」
「確かに、もっと知られるべきだよな」
「でも、妖怪の声は普通の人間には聞こえませんし。もったいないですねぇ」
空衣くんが残念そうに言った。紅茶をすすりながら水鳥先輩が一人でもったいないもったいないと呟き続ける。
「あ、だからワイドショーがついてたのね。彼女の歌は人間には聞こえない。だからノイズも歌声も聞こえずに、民法のアナウンサー声だけが外に漏れてた」
「なるほど」
水鳥先輩が珍しく素直に返事をした。わずかな優越感が心地いい。美紀が両手を合わせてぱちぱちと拍手する。薫先輩と空衣くんも加わり、拍手はかなりの音となった。テレビのノイズが少し嬉しそうにざわざわと囁く。
「うん。良い歌だったよ。君」
『またおいで。君たちなら大歓迎だ』
ミニマムベートーベンがニコニコ笑いながら手を振った。同じように偉人達が手を振ってくれる。人差し指くらいしかない大きさの彼らが手を振るとちょっとした指人形劇みたいで可愛かった。

「それじゃ帰ろうか」
薫先輩が右手を戸にかけた瞬間、どたばたという音が聞こえてきた。マズい。全員に緊張が駆け巡る。
ゆっくりと近づいてくる気配は間違いなく鬼山だった。どうしよう、と口だけで美紀が言う。んなこと私に聞かれても知らない。いざとなれば先輩を置いて窓から飛び降りればなんとかなるだろう。幸運なことに動物霊ならうようよいる。憑依させて逃げよう。美紀と空衣くんは連れて行ってあげないこともない。
「だから友里君。君は先輩に対する尊敬の念を忘れてきたのかね」
「シー！」
全員が合唱した。足音は近付く。そろそろ窓を開けようと思って立ち上がったその時。
「全く。君達は僕を侮りすぎだよ。こんな時の対策をこの僕が練っていないとでも思ったのかい？」
どの口がそんなことを言っているんだ。
「……」
白い紙をぱたぱたと振ると、私達と同じ大きさの人型の何かが現れた。何事かぶつぶつつぶやくと光速で移動を始めた。
「馬鹿な教師陣はこれでだまされるだろう。さぁ行くよ」
「どこから？」
薫先輩が聞いた。しばらく沈黙の時間が流れる。
「……飛び降りる」
「あほか。ここ五階だぞ？」
「人間はやればできる」
「できないことだってある」
珍しく薫先輩に言いくるめられている。非常に新鮮だ。
「そうだ。友里君。憑依させて飛べないかね？」
「体の構造は変えられませんしそんな都合よく妖怪が居るとでも？」
さらに珍しいことに私にも言いくるめられている。いい気味だと思う一方、このままじゃヤバいと脳味噌が警報を鳴らす。見つかる

のも時間の問題だ。
その時、空衣くんが得意げに鼻を鳴らした。
「人間は空を飛べなくても、妖怪は飛翔することができますよ」
「あ！」
全員がいましがた気付いたように叫んだ。我らが超研には本物の妖怪がいたことを。そしてその妖怪は後輩だと言うことを。
「空衣君！今すぐ変化して脱出したまえ！校舎を少々破壊してもかまわん！」
先輩の特権をフル活用して水鳥先輩が叫んだ。校舎を破壊するのはいけないことだが時と場合によっては許してくれて良いと思う。
黄金色の毛並みに捕まって空をかけると、校舎はぐいぐいと遠のいていった。

## 3、貴方の歌をお聞かせください。（後書き）

「ねぇ、空衣くんの毛並みってふさふさだね」
「確かにふわふわね。シャンプーとか何使ってるの？」
「パ●テーンです」
「「さっすがー」」

## 4、悲鳴は遠く高く響くものでして

投げ飛ばされた。そう感じた。
「立ちなさい友里！そんなのでこの……が務まりますか！」
務めようと思ったことはないのだが。
「さぁ立ちなさい！朝のけいこをサボるなど！」
ヒステリックな声が耳障りだ。黙れ、黙れ黙れ。
「貴女がそんなのだからクロが死んだのでしょう！」
黙れ！

『友里嬢。ずいぶんうなされていましたね』
「うるさいわね……」
どうやら久方ぶりに夢を見たらしい。頭がずきずきする。
よっこらしょ、と自然に声が出てしまったあたり老化が始まっているのだろうか。
「友里様、起きてください」
「もう起きてるわよ」
畳の上で上体を起こすと、自然にため息が出た。
どうやらそろそろタイムリミットだ。
「友里いいいいいいいいい！」
さよなら、私の平和な時間。

すぱぁぁぁんと開けられた障子の奥からずかずかと我が母上さまが入ってくる。がしっと肩をつかんだと思ったら華麗に投げ飛ばされた。なんだこのデジャビュ。
「いつまで眠っているのです！昨日は昨日で遅くまで遊び……私は貴女をそのように育てた覚えはありません！」
「育てられた覚えもありません、母上様」
「いいですか！貴女はこの宙野コーポレーションの跡取り！朝は五時に起きろと何度言ったら！」
「世間一般的に高校生と言うのは六時半に起きられればそれで優秀の範囲内では母上様」
「あぁ、旦那さま。申し訳ございません。私のいたらぬばっかりに」
「聞けよ」
朝の五時からこんな大騒ぎしてごめんなさい、近所の皆様。

世間的にはダイニングルームなどに机やいすが並び、そこで家族そろって和気あいあいとした食事をするのだろうが、我が家はちと特殊だ。
食事では私語厳禁。テレビなんてもってのほか。ひたすら無言の中、同じ食卓を囲むのは祖母と母と私という何とも女の園状態だ。しかしこのムードは険悪以外の何物でもない。
「ごちそうさまでした」
祖母が箸を置いた。全員が居住まいを正す。怒鳴られる覚悟はできているが怒鳴られるだけならどれだけよかったか。
「友里。表に出なさい」
出た。伝家の宝刀、表に出なさい。
「昨日何をしていたのか吐きなさい」

「……吐いて信じてくれたらどれだけよかったか」
「何か言いましたか？」
六十代とはとても思えない殺気を放つ祖母は人間ではないのかもしれない。首根っこをつかまれて庭に放り投げられる。本日二回目。
「正座をしなさい。それからこれを持ちなさい」
どん、と膝の上にのせられた漬物石。
今日は学校に行けないかもしれない。

学校には結局二時間遅刻して、皆勤賞を取り逃した。そんなことを祖母に言うとヒステリックに叫ぶのだろうが。
「友里ぃ。疲れてる？」
「かなり」
「……絞られた？」
「足に赤いあざがある」
「ご愁傷さま」
美紀が苦々しく笑った。リプドンのストローを加えたまま行儀悪く喋る。
「一般的な家庭ってこれだから疲れるんだよね。凡人は超人に対する理解が足りないと思うよ。まったく」
「夜遅くに歩いてたら職質されたりする？」
「それは、まぁね」
美紀がリプドンを一息で飲み干す。すごい肺活量だ。潜水士の資格だって取れるかもしれない。小さなパックを文字通り握りつぶして箸を取った。
「いただきます」

「はい、いただいてください」
屋上にさわやかな風が吹き抜けた。一人で食べるには量が多すぎる弁当を美紀に半分押しつけて、平和な昼休みが過ぎていく。
「友里は大変だねぇ……」
「まぁ、運命だと思えるだけましってことで」
「家でも学校でもクールの仮面かぶってて疲れるっしょ？」
「まぁ、ね……」
軽く自嘲気味に笑いながら、肩で昼寝をしている猫を見た。ここ最近暑いと思ったらお前等の所為か。猫は嫌いじゃないからまぁ良いが。
さわさわと揺れる風を感じていると、不意に猫の耳がぴん、と立った。
『友里嬢。何か来ますよ』
「さすが猫ちゃん。敏感だね」
『美紀殿。その呼び方は止めてくださいと何度言ったら』
「聞こえなーい。でも妙だね。妖怪の活動時間は夜なのに」
屋上に吹き荒れる風が急に強くなった。髪の毛が乱される。空の紙パックが宙に舞った。
「老化が始まっているかもしれない。これ、なんか歌に聞こえてきた」
『幻聴ですか？友里嬢。だからあれほど普段から野菜を採れと』
「幻聴じゃないよ。猫ちゃん」
美紀の目が細まった。声に鋭さが感じられる。
「これ、あの人の歌に似てる」
「昨日の人？あぁ、確かに」
澄んだ声に込められた悲しみの色はまるで昨日のそれだった。なめらかにつづく哀の歌が途中でぶつりと切れる。
刹那、さわさわと感じていた悪寒が一気に強まった。
「……き、気色悪ぅ……」
「美紀。失礼」

「だって気持ち悪いじゃん。霊感強いとこういう感覚も鋭くなって嫌だなぁ全く！」
「私たちがこれだけ強く感じるってことは、普通の子達も結構な悪寒を感じてるかもしれないわね」
顎に手をあてると、肩にのっていた猫が頭に移動した。しっぽをぴんと立てて威嚇する。
「どうしたの？」
『フゥゥゥゥゥ――――！！』
「ねぇ、聞いてる？」
威嚇を止めない。ぞくりとした寒気が全身を這う虫のような感覚に変わる。
「気持ち悪い……ッ！」
「なんかマズイ感じだね……唯一まともに妖怪と戦えるあの人の所にとりあえず逃げッ！？」
走り出そうとした美紀の目の前を風の刃が通過した。校舎の鉄扉がきしむ。
「……」
「美紀、大丈夫？」
「し、死ぬかと……」
立ちあがってスカートのすそをはらう。曇天になった空を猫がひたすら威嚇していた。こんなに牙をむいているのを見るのは初めてだ。正直怖い。
「とりあえず、逃げなければ始まらない！」
「始まらせる必要もないと思うけど……」
「良いから走る！」
階段を引っ張られるようにして走る。途中何度か転びかけた。後ろから何かが追ってくる感覚に吐き気がする。
「コンピューター室に逃げ込めばこっちのもんだから急いで！」
「ねぇ、美紀。忘れてない？」
「は？」

「体力的には私のほうが美紀より多いってこと」
「へ？ちょっと友里あんた接触恐怖症は！？」
「そんなこと言ってる暇があったら逃げる！」
ひょいっと担ぎあげると美紀が変な声を出した。こっちが変態に見えるからやめてほしい。段差なんかほぼ無視で進む。途中生徒にすれ違ったりもしたがスルースキルはこういうときに多用するものでして。
廊下を走るなと叫ぶ教師が途中で黙った。肩を震わせている。とうとう普通の人々にも影響が出始めた。少々、いやかなりヤバいか。
「次のコーナー曲がったらコンピューター室！」
「さぁ各馬一斉にスタートォ！」
「あんた楽しんでるでしょ」
まだ何かが追っている感覚は止まない。ひゅお、と風がうなって頬が裂けた。血がにじむ。
「ちょ、ちょっと友里大丈夫！？」
「……正直言って漬物石よりマシ」
「丈夫に育ってくれてお母さん嬉しいよ」
「黙れ」
角を曲がりきった。引き戸を思いっきり引っ張り中に滑り込む。今さら接触恐怖症の症状が出て手が震え始めた。
「やぁ、友里君。美紀君。また何か厄介事かい？」
「あ……んたは、気付いてたなら、何とか、してくださいよ……」
「二人ともよく頑張った。よく逃げてきた」
「薫先輩！？」
美紀があんぐりと口を開ける。よ、と手を挙げるところはそこそこきまっているのだが、口に咥えた苺牛乳が全てを相殺していた。もったいない。
「何があったんですか。どうしたんですか」
「説明しても良いんだけどね。空衣君はまだかな？」
水鳥先輩がポケットから無造作に紙を数枚出した。その辺のティ

ッシュペーパーと見間違えるほどくしゃくしゃになったそれを丁寧に伸ばす。
「遅くなりました！」
「やぁ、空衣君。君も無事で何よりだよ」
「あれなんですか。鎌鼬にしては少々タチが悪いですけど」
「それも後で説明するよ。まずはだね、君」
のばされた和紙に刻まれた文字が紙を滑っていく。空衣くんの喉が引きつる音が聞こえた。
「僕それ嫌いなんです！」
「知ってるよ。だから早く向こうに行きたまえ」
「酷い！」
あんまりです！と空衣くんが叫んでこちらに逃げてきた。頭に狐の毛がついている。
「先輩、酷いと思いませんか！？」
「まぁそれがトモだし」
「薫先輩まで！」
小柄な、私よりも身長が低い空衣くんがおいおいと泣き始めた。男なのに泣くなと言いたいところだが妖怪に術式は酷だろう。少しだけ同情する。
「さぁ、片づけてしまおうか」
水鳥先輩がニヒルに笑った。前方から風の音がする。生徒の悲鳴が聞こえた。廊下を血が滑る。
「血！？」
美紀が過剰反応した。
「鎌鼬系の妖怪は風を刃物みたいに操れますからって先輩こっちにそれ向けないでいたいいたいいたい！」
「おいトモ。苛めてやるなって」
可哀そうにしっぽまで出した空衣くんが悲鳴を上げる。これが楽しいと思うのは私がサドだからだろう。
「あぁすまなかったね。つい楽しくてね」

結論から言おう。この人は私の上をいくサドだ。
「遊びは終わりだ。さっさと片付けないとダージリンが渋くなってしまう」
ぱち、と電気質な音がした。
ぱちぱちぱちぱちっ、ばちん！
「いいいいいやあああああああああああああああああああああああ！！」
「空衣落ち付けーッ！」
「嫌ですその音嫌いですぅぅぅぅぅ！」
「頼むから爪は立てるな痛いから痛い！」
はぁ、と美紀がため息をつく。耳栓を取り出して空衣くんの耳に当てた。
「せんぱーい。ちょっと手加減して……」
「今年のファーストフラッシュなんだ渋くさせるわけにはいかない」
「聞こえてないみたいですね」
「あいつの紅茶好きは以上だからな」
電気質な音は強まっていく。空衣くんは哀れうずくまっている。
最後に一度大きな爆発音がして、嫌な感じは完全に消し飛んだ。

## 4、悲鳴は遠く高く響くものでして（後書き）

「さぁ終わった。飲もうか」
「トモ。まず空衣に謝れ」
「すまなかったね空衣くん。もう二度としないよ。たぶん」
「たぶんじゃ困りますぅぅぅぅ！」
私の中の空衣くん像が音を立てて崩れるのを感じた。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4915s/

---

四丁目裏路地の隠し事

2011年7月13日03時39分発行